

特集

# 詩の授業を 楽しむ!

子どもと詩の授業を楽しむには? 詩の授業で育てたい力とは?  
今号は、筑波大学附属小学校の桂聖先生へのインタビューをとおして、  
詩の授業の魅力に迫ります。  
国語の妖精コッシーによる解説もお楽しみください。

## 詩の授業を

もっと楽しく、  
もっと豊かに

桂 聖先生 インタビュー

——昔から詩は好きでしたか。

昔から好きだったというわけではなく、  
教師になってからたくさん読み始めました。  
もともと詩が好きな人は、無意識に詩の意  
味を解釈して、なんとなく読めてしまうの  
ではないでしょうか。意味を解釈するため  
の読みの着眼点を具体的に言語化していく  
のが教師の役割です。最初から詩が好きで

たくさん読んでいなくても、詩のよい授業  
はできます。

——詩は苦手だと思う先生こそ、詩の授業  
が得意になるチャンスかもしれませんね。

そうですね。よい授業のイメージをもつ  
ことが大事です。音読だけではもったいな  
い。詩のよい授業を参観したり、詩の指導

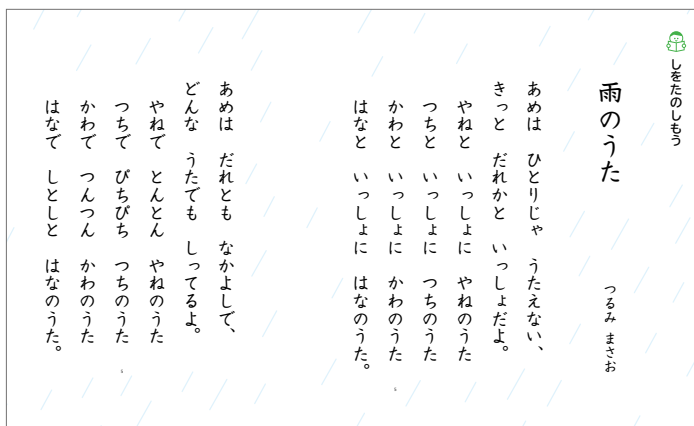
に関する本を読んだりする機会が多くある  
といいですね。

——詩の授業で何を大切にされていますか。

意味を解釈する力をつけること、つまり、  
書かれている言葉から、書かれていない意  
味や意図を考えることです。意味を解釈す  
る力は、生きていくうえで欠かせません。  
同じものを見ても、同じ経験をして、そ  
こから得る情報が違ってくる。その力を  
つけることのできる経験の一つが、詩を読  
むことなのだと思います。

例えば、五年に掲載されている「蛇」  
(ジュール・ルナール／岸田国士訳)を読  
んでも、文字で書かれた「長すぎる」とい  
う言葉の表面的な意味だけを捉える人と、  
その場面の状況を思い浮かべる人がいます。  
昼、茂みから蛇が出てきた。どんどん出て  
くる、長すぎる——と驚いている状況や心情  
を想像する人もいるかもしれません。こ  
うした解釈は、「いつ」「どこで」「だれが」  
といった作品の設定に関する読みの着眼点  
をもっているからです。自分なりに意  
味を解釈できるための読みの着眼点をもた  
せることを大切にしています。

——子どもたちが自分なりに意味を解釈し



▲ 2年上巻「雨のうた」P110-111

ていくための力を授業で養うのですね。

意味を解釈するためには、作品の設定、視点、表現技法、中心人物の変化、主題といった、文学特有の読みの着眼点を知っていることが必要です。その着眼点を子どもたち自身が見つけて、自分ごととして考えることができる授業を目ざしています。

——どのような工夫をされているのですか。

例えば、教師が、「この詩は何音でできていますか」ときけば、子どもたちは、「五音、七音」などと答えると思います。でもそれは教師にきかれたから答えているだけなんです。自分から見つけたわけでもないし、必要感をもって考えているわけでもありません。そこで、詩への出会わせ方を工夫することや、作り手の立場に立たせることを通して、どう書かれているかに自然と目を向けられるように工夫しています。

——詩への出会わせ方の工夫について教えてください。

教科書で扱っている詩は、短い言葉で書かれているので、ぱっと見せると、子どもたちは読んだつもり、わかったつもりになってしまいます。例えば、一行ずつ見せるのも効果的な出会わせ方の一つです。言

語感覚を働かせることができますね。他にも、詩の一部を隠すこともあります。二

年上巻の「雨のうた」(鶴見正夫)ならば、「雨」「あめ」という言葉を隠して提示することで、子どもたちは自然とオノマトペに着目するでしょう。教材やねらいに合わせて、出会わせ方を考えます。

また、教科書は紙幅の関係から複数の詩を同じ紙面に載せることがあります。ページに二作品をプリントアウトして出させてあげるといいですね。感覚を働かせながら、じっくりと味わえます。

さらに、経験を引き付けて読むことも大事です。先日、三年生の授業で扱った詩に「コンダクター」という言葉が出てきました。「コンダクター」を知らなければ、状況を想像するのは難しい。そこで、音楽の先生に指揮棒を振ってもらった経験とつなげる言葉がけをしました。経験がない場合は、写真や動画で補助してもいいですし、国語辞典やタブレット端末を活用して自分で意味を調べる力をつけておくことも大切です。

——その後、作り手の立場に立つことで、読みの着眼点を見つけていくんですね。

段階を踏んでいくことが大事ですね。ま

三年上巻の「わたしと小鳥とすずと」(金子みすゞ)は、主題にせまりたくなる詩です。「みすゞさんがいばん伝えたいことは何?」と問いかければ、子どもたちは最後の連に注目するでしょう。

各学年の三学期には、複数の詩が掲載された単元が配置されていますが、そうした場合は、一人一人が選詩をして、その理由を伝え合う活動を設定してもいいでしょう。

——日々取り組んでいる活動はありますか。

特に、低学年では、音読や暗唱を大切にしています。詩集やアンソロジーから自分で好きな詩を選んで暗唱し、週に一回、朝の活動で発表しています。みんなが同じ詩を覚えるのではなくて、子どもたちが自分で選ぶことが大切ですね。

一(三年生の感覚優位の時期に、詩をたくさん楽しみ、言葉への感覚を養うことが、四年生からの言語生活の土台になります。適切な時期を逃さないようにしたいですね。

——桂先生の授業は、子どもたちがどんどん詩を作っていく姿が印象的です。

表現することによって、自分の思いを開示できる側面もあるのかもしれない。以前、友達関係に悩んでいた子が、工藤直子

ずは、感覚を働かせながら詩と出会い、それをベースに「もしも順序が入れ替わっていたら?」「もしも他の言葉だったら?」といった仮定的な思考を通して、元の詩と比較し、意味を深く考えていきます。

詩の書かれ方に対する問いをもたせるには、作り手になって読み直すことがたいへん有効です。どう書かれているかに目を向けることになるので。例えば、詩の一部分の翻作を仕組むことも効果的です。

——中心となる問いや活動は、どうやって決めていますか。

他の文学作品にも共通しますが、詩の授業も、教材の特性に合わせて問いや活動を計画することが大切ですね。

例えば、先ほど例に挙げた「雨のうた」は、オノマトペに着目した翻作ができます。翻作をとおして、語り手の視点はどこか、心情はどの言葉からわかるかなど、詩を読み返していきます。「音」じゃなくて「うた」と書いてあるから、楽しい気持ち」という子がいるかもしれません。「やねでんぱん」でもいい?」と問いかければ、「歌だから、もっと優しい音だと思ふ」と考える子もいるでしょう。オノマトペにも心情が表れることに気づくことができます。

さんの「のはらうた」の登場人物になりきって、彼女自身の悩みをたくさん詩に書いていました。もやもやした思いを昇華して、現実の世界での折り合いをつけているようでした。詩の創作にはそういう効果もあるのかと気づかされました。

——表現することは大切なことですね。

子どもたちは、表現者の立場に立つときに本気を出します。言葉の感覚を働かせて詩と出会い、そこにある論理を発見し、自分なりに想像して創造する。そうした経験を積み重ねることによって、見えているものから見えていないものの意味について解釈をしたり考えたりする力が育つ。詩の授業での経験が、これから生きる力につながっていくといいなと考えています。



桂 聖

筑波大学附属小学校教諭。筑波大学非常勤講師、日本授業UD学会理事長、全国国語授業研究会理事、『例解学習国語辞典』(小学館)編集委員。著書に、『国語授業のユニバーサルデザイン』(東洋館出版社)、『なぞらずにうまくなる子どものひらがな練習帳』(実務教育出版)などがある。光村図書小学校『国語』教科書編集委員。